ソメイヨシノ

徳　山　森松　光紀

今年もソメイヨシノ満開の季節を迎えました（4 月 4 日現在）。子供のころから毎年花見を楽しみにしていましたが、最近は感慨深いものがあります。「来年も見られるかな」という訳です。西行法師の有名な和歌に「願はくは花の下にて春死なむその如月の望月のころ」（山家集）があります。その前書きには「西行、山桜を見て詠める」とあり、この桜はソメイヨシノではありません。この歌は奈良市にある佐紀神社（または佐保山付近）で詠まれたとされています。西行法師は文治 6 年（1190 年）2 月 16 日に亡くなりましたが（72 歳）、この歌の中の「如月の望月（旧暦 2 月 15 日）」は彼の命日とほぼ一致しています。従って、この作が遺詠なら味わい深いのですが、明確な記録はないそうです。山家集には春の歌が 170 首含まれ、その中の 103 首が桜を詠んでいるとされます。「散る花はまた来ん春も咲きぬべし別れはいつか巡りあふべき」もその一つです。

ここでいう山桜とは山地に植生する野生の桜の総称ですが、別に日本固有種の「ヤマザクラ」という品種があるそうです。さて、ソメイヨシノは西行の時代にはまだこの世にありませんでした。ソメイヨシノは江戸時代末期（19 世紀中頃）に、東京の染井村（現在の豊島区駒込）でエドヒガンとオオシマザクラの交配により誕生したとされます。明治政府は公園整備や街路樹の一環としてソメイヨシノを推奨し、やがて全国各地に植樹されるようになりました。その結果、明治・大正時代に東京の上野公園や皇居外苑、大阪の造幣局、京都の円山公園などで積極的に植樹が行われました。更に明治末期から昭和初期にかけて、鉄道会社が沿線美化の一環として、各地の駅周辺や線路沿いにソメイヨシノを植えました。これがソメイヨシノを全国区とした理由と思われます。しかし、本品種はクローン増殖であるため、寿命（60 ～ 80 年）の近づく老齢化が全国的に進行し、現在では各地で植え替えの問題が起きています。

個人的にはソメイヨシノ満開にはつらい思い出があります。父がくも膜下出血のために昏睡状態になり、3 月末に愛媛県松山市の総合病院で息を引き取りましたが、このとき病院の庭の桜が満開でした。その後、長生きした母はガンの再発で死亡しましたが、このときは群馬県前橋に居住しており、有名な敷島公園の満開の桜の下を自家用車で東京の病院に運びました。

山口大学にいた頃、ときわ湖のほとりで行う花見大会は医局の大切な年中行事でした。4 月第 1 週の土曜日昼時と決めていましたが、当日は医局員の一人が朝から場所取りに派遣されました

写真 1　ときわ湖畔の桜

（**写真 1**）。この日は医局員の家族を含めて多数が集まり、バーベキュー大会を開催しました。ワイワイ騒いでいると、ときわ湖で飼われているモモイロペリカンが餌をねだりに来ることがあり、手に持っている肉を横取りされることもありました。「カッタ君」がどうか分かりませんが、子供たちは「カッタ君が来た」と大喜びしました。この時期にときわ湖岸を確保できないこともあり、その場合は大学の傍を流れる真締川の上流にある護国神社の境内を借用して花見大会を催しました。ここの桜はみな大木で見事な花々でした。

写真 2　徳山医師会病院駐車場の桜

宇部市に初めて来たとき、大学の医局員から「真締川は宇部市のセーヌ川、その背後の小羽山団地は宇部市のビバリーヒルズと呼ばれる」と紹介されました。1999 年の台風 18 号は熊本市に上陸したのち、豊後水道を横断して宇部市に再上陸しましたが、このため真締川は溢れて山口大学医学部校舎・病院は水に浸かりました。このとき私たちの研究室・医局も浸水し甚大な被害を蒙りました。宇部市のセーヌ川も清流のときばかりではありません。

さて、その後 2004 年に徳山医師会病院に就職しましたが、当時の病院駐車場にはたくさんの桜が植えられており、満開の景色は豪華でした。今は存在しない旧病棟を背景に 2010 年に撮影した写真があります（**写真 2**）。昼食後にはこの辺りを散歩するのが楽しみでした。残念なことに 2012 年新病棟建設に当たりこれらの桜はすべて伐採されました。しかし、新棟落成後に植えられたソメイヨシノが成長して次第に多くの花をつけるようになっています。

以前、京都の学会に行ったときに、途中抜け出して醍醐寺に行ったことがありました。秀吉の醍醐の花見（1598 年）の跡地を見たかったからです。醍醐寺は直線的に京都駅の南東約 6km ですが、繁華な町ゆえタクシーで到着に時間がかかりました。このときは既に 5 月、新緑のさなかでした。花見の中心になった下醍醐の三宝院庭園に行き、そこで解説を見ると、さらに上醍醐に向かう山道でも行われたとの案内がありました。見上げると山頂は 450m の高さにあり、山道を登り始めましたが途中の花見御殿跡まで行ったところで足が動かなくなり下山しました。醍醐の花見については、この日のために吉野や近江などの畿内からかき集めた 700 本の桜が植樹されたそうです。宴では秀吉の正妻高台院（ねね）や西の丸殿（淀殿）を含めて約 1,300 人の女性が招かれましたが、男性としては秀吉、秀頼の他に、客人としては前田利家が見えるのみとのことです。諸大名は伏見城から醍醐寺までの沿道の警備や、会場に設営された八番の茶屋の運営に当たりましたが、花見の客としては招かれなかったという不思議な催事でした。これらの情景については安土桃山時代の狩野派作品として「醍醐花見図屏風」が複数残されています。秀吉はこの催しの 5 か月後に没しており、最後の見せ場になりました。桜は歴史を通じて人々の喜怒哀楽を見守って来たように見えます。（資料蒐集にウィキペディア、ChatGPT を利用しました）